

## 方形周溝墓からみた朝日遺跡の方位観

東海大学文明研究所 白川美冬

### 1. 東西南北を知る前のわたしたち

#### (1) 絶対方位と民俗方位

私たちが普段、何気なく使っている東西南北の方位観は、地球上のどこにいても同じ方向を指すことから、「絶対方位」とも呼ばれています。しかしながら、東西南北という方位観が、いつ・どのように日本に伝わったのかは、明確にはわかっていません。

東西南北が普及するまでのあいだ、人々が方位観を持っていなかったのかということ、もちろんそうではありません。人類学や言語学などの研究成果によって、東西南北を知る前のわたしたちは、「民俗方位」と呼ばれる地域の自然環境や景観を基準とした方位観を持っていたことが明らかになっています。今日は本題に入るまえに、インドネシアと琉球地方の事例を紹介したいと思います。

#### (2) インドネシア・バリ島の民俗方位

バリ島の人々は山と海を基準とした民俗方位を持っています。山には農耕民に必要な不可欠な水源地があり、山頂は神々の故郷と繋がると信じられていることから、山は良い方位とされます。一方、海は毒を持つ危険な魚や海へびの住処があり、悪霊の住処や黄泉国がある下界が広がる悪い方位と考えられているようです(倉田 2009)(図1)。人々はこの山と海の対比を日常生活の中に積極的に取り入れてきました。

この民俗方位は埋葬方位にも使われています。キンタマーニ高原にあるトルニャン村では、死者の頭を山側に向け、足を湖側に向ける風習があります(倉田 1978)。また北バリのトゥンガナン村では頭を海のある南側に向け、足を山のある北側に向ける慣習があるようです(大重 1971)。

またバリ島では、山と海を基準とした民俗方位のほかに、太陽の出没位置を基準とした民俗方位も存在します。

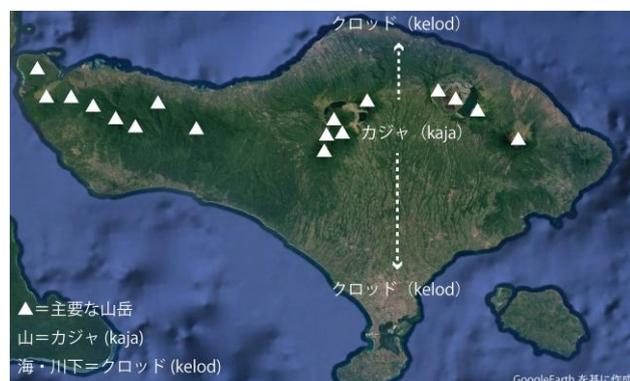


図1 バリ島の民俗方位

インドネシアで暮らす多くの民族に  
いえることですが、彼らは家の長軸  
を東西方向に向け、入口を西側に造  
ります。家に入る人が日の出を向く  
格好です。これは生者の靈魂が太陽  
の沈む西側へと連れて行かれること  
を防ぐためだといわれています(大  
林 1977)。このように民俗方位は建物  
や死者の埋葬方位に影響を与えてい  
るのです。



図2 波照間島の地形と民俗方位

### (3) 琉球地方・波照間島の民俗方位

琉球地方には太陽の出没位置や季節風を基準とした民俗方位が存在しています。太陽の昇る東方は琉球方言でアガリなど、夕日の沈む西方はイリーなどと表現されます。

波照間島では東はアリ、南はペー、西はイリ、北はニシと呼ばれています。アリ(東)とイリ(西)は太陽の出没を由来とし、ペー(南)とニシ(北)は、夏に南西方向から吹く季節風ペーナチ(南風)と冬に北東方向から吹くニシ(北風)が語源のようです(金城 1950)(図2)。これは言語学の研究から導かれた成果ですが、文化人類学者は島の岬の位置が東西の基準になった可能性も指摘しています。波照間島の人々は東方の岬タカナザスを東、西方の岬シマザスを西と捉えていたというのです(鈴木 1978)。

いずれの説も南北の基準が季節風に由来することは共通しており、波照間島の人々が季節風に関心を持っていたことがわかります。なぜ季節風が重視されたのかというと、人々は夏の涼しい季節風を屋内に取り込むために戸口を南西から南南西方向に向け、冬の寒い季節風が吹く北東に背を向ける工夫を行ってきました。こうした家の配置は八重山群島の与那国島や西表島、新城島などでも確認されており(鈴木 1978)、民俗方位は生活の知恵として世代を超えて、現在まで受け継がれていることがわかります。

### (4) 民俗方位を考える

以上のように、民俗方位は地域固有の傾斜(山と海、川上と川下)や風位、太陽の出没位置の三要素を基準に形成されています。バリ島や琉球地方の事例からも明らかなように、民俗方位は建物や墓の空間配置に強い影響を与えてきました。

これは見方を変えれば、家や墓の方位を整理し、地域をとりまく景観や自然環境との関係を考えることで、各地の人々が持っていた地域固有の民俗方位に迫ることができる可能性を意味しています。

私はこうした問題意識をもって、文字を残さなかった弥生時代や古墳時代の人々が、どのような民俗方位を持っていたのかを研究してきました。今日は愛知県朝日遺跡の方形周溝墓を中心に、弥生時代中期から古墳時代前期にかけて濃尾平野を生きた人々の民俗方位を考えてみたいと思います。

## 2. 朝日遺跡の民俗方位

朝日遺跡は清州東インターチェンジ周辺で発見された弥生時代の大規模集落です。今日は 625 基もの方形周溝墓が確認された、弥生時代中期前葉(紀元前 400 年頃)から後期前半(紀元後 1 年頃)<sup>1)</sup>の朝日遺跡をみていきたいと思います。

### (1) 朝日遺跡の周辺環境

朝日遺跡が形成された弥生時代中期前葉、遺跡周辺の植生環境はアシなどの草本類とマツ属で構成されていたことが木製品の研究でわかっています(樋上 2016)。そのため木々が視界を妨げる状況ではなく、遠くまで見渡せる環境だったと考えられます。

湿地が広がる遺跡の周囲を見てみると、北東には御嶽山、東には猿投山、北西には伊吹山をのぞむことができます。気象庁の気象データによると、6月から8月は南南東から風が吹き、それ以外の時期には北北西から風が吹く傾向があるようで、冬に伊吹山から吹き降ろす冷たい北風は伊吹おろしとも呼ばれているようです。

この周辺景観に中期前葉の太陽の出没位置を再現したものが図3です。夏至の太陽が伊吹山の頂上付近へと沈み、冬至の太陽は武平峠へと沈んでいく情景が復元できます。こうした環境下で生活を営んでいた人々は、何を民俗方位の基準にしたのでしょうか。

### (2) 弥生時代中期前葉(紀元前 400 年頃)の民俗方位

弥生時代中期前葉の朝日遺跡では、谷Aの南北に環濠をもつ居住域があり、その東西に墓域が営まれました(図4)。東側よりも西側の墓域が少しだけ先に造られたようです。西墓域は比較的小さめで規模がそろった方形周溝墓を放射状に配置した一方で、東墓域には大型方形周溝墓が列状に配置されたことがわかっています。集落の指導者が埋葬されたであろう大型方形周溝墓が東墓域に造られた理由について、赤塚次郎さんは居住域からみた太陽の昇る方向が意識された可能性を示唆しています(赤塚 2009b)。

中期前葉の方形周溝墓 95 基の長軸方位を整理したところ、西墓域ではややバラツキが認められますが、北墓域では 19 基(90%)、東墓域では 24 基(86%)が年間の太陽の出没位置に収まることがわかりました(図5・6)。一部で山岳の方向も向く事例も確認されますが、北墓域と東墓域の方形周溝墓が扇状に広がることを考慮すると、特定の山岳が意識された可能性は低く、太陽の出没位置が意識されたことがわかります。

### (3) 弥生時代中期中葉(紀元前 320 頃)の民俗方位

中期前葉の基本的な集落景観は中期中葉にも継承されました。中期前葉との違いは、北区画の東側に三重の環濠帯が出現し、墓域が居住域の東側に集中する点にあります。

この時期も大型方形周溝墓は引き続き東側の墓域に造られた一方で、規模の揃った方形周溝墓は東墓域の北側に営まれました。太陽を意識した墓造りも継続していることから、朝日遺跡には太陽を基準とした民俗方位が存在したと考えられます。この太陽を意識した墓造りが中期前葉から中葉の大型方形周溝墓に多いことは重要です。

朝日遺跡から北へ約 6.5km の位置に営まれた猫島遺跡でも、太陽の運行が意識された可能性があります。太陽を基準とする民俗方位が共有されていたのだと考えられます。

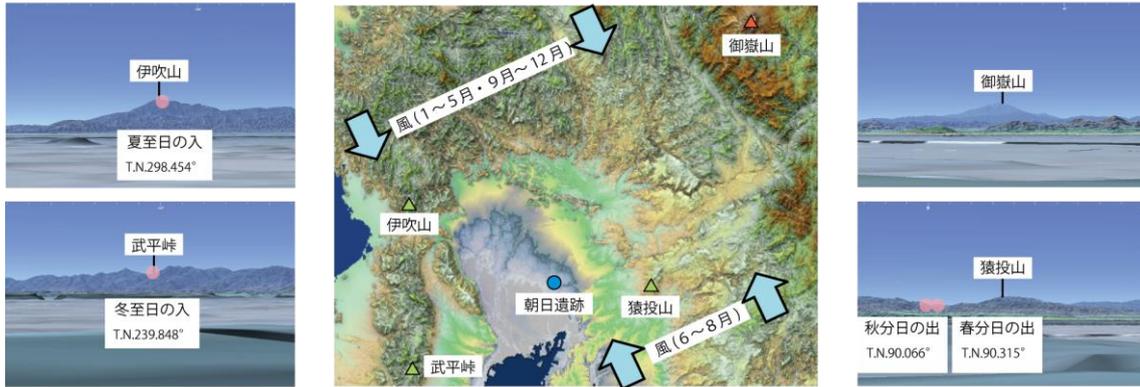


図3 朝日遺跡の周辺環境

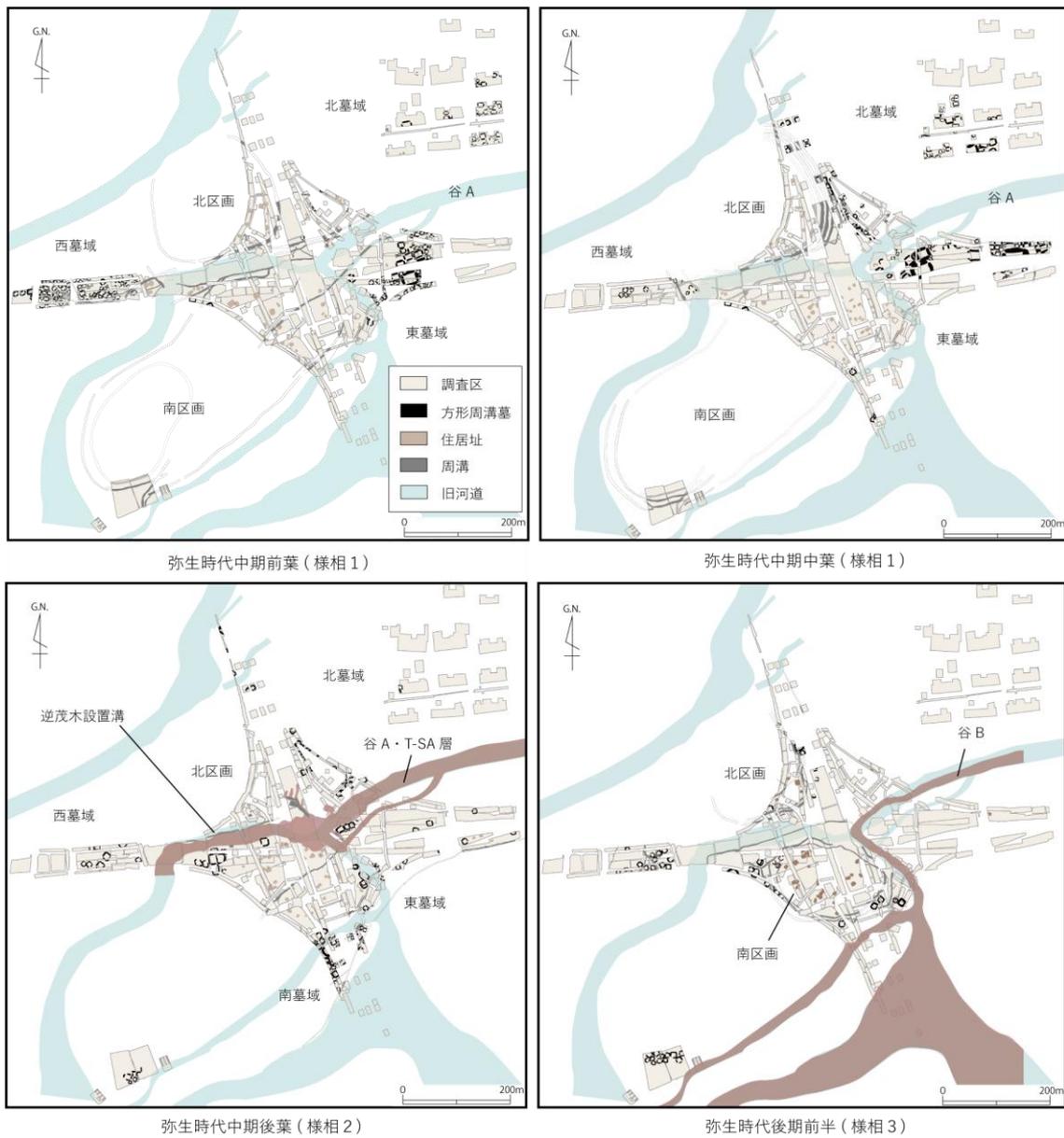


図4 朝日遺跡の集落変遷

#### (4) 弥生時代中期後葉(紀元前 210 年頃)の民俗方位

安定した集落経営が続いていた朝日遺跡でしたが、弥生時代中期後葉に急激な変化が訪れました。明確な区画や環濠が集落から消滅し、北区画からは人々の生活痕跡がなくなってしまいます。そして方形周溝墓に注目すると、長方形から正方形へと形が変化し、周溝の形状も多様化します。また一辺 30m を超える大型周溝墓も造られなくなります。これまでの伝統や慣習ではなく、新たな方向を模索し始めるのです。この変化と連動するかたちで、埋葬方位には東西方向への明確な意識が確認できなくなります。

なぜ伝統的な朝日遺跡らしさは影を潜めたのでしょうか。この時期、瀬戸内地方に起源をもつ凹線文系土器が各地へ広がり、朝日遺跡にも新しい文化が持ち込まれました。さらに中期後葉は気候の急激な寒冷多雨化が進んだ時期でもあり、各地で洪水が頻発し、低地部は住みにくい場所になりました。朝日遺跡では中期末頃に大洪水が発生し、谷 A の東部が被災しました。埋葬方位に一貫性が認められなくなった背景には、西側の文化の流入と気候変動がもたらした社会全体の流動化が原因だったと私は考えています。

#### (5) 弥生時代後期前半(50 年頃)の民俗方位

この混乱を経て、大洪水から復興した時期が弥生時代後期前半です。谷 B という人工水路を掘削することで水害から身を守りつつ、集落を立て直していきました。そして小規模な環濠を掘削し、南北に区画をもつ伝統的な集落景観が再び出現します。北区画には複数の建物と広場で構成された祭祀空間も形成されました。

この祭祀空間のなかで一際目を引くのが方形周溝墓 SZ132 です(図 8)。環濠内に方形周溝墓が造られることは珍しく、墳丘には長方形という伝統的な形が採用されました。そしてその埋葬方位には太陽を基準とした民俗方位が選択されました。つまり集落を象徴する特殊な方形周溝墓に伝統的な要素が多く取り入れられたのです。

なぜ SZ132 に民俗方位が採用されたのでしょうか。ここで注目したいのがパレス・スタイル土器に描かれた赤彩円文です。朝日遺跡から出土した赤彩土器の約 10% に描かれており、溝など性格の不明な遺構を除けば、方形周溝墓と北区画の祭祀空間内の竪穴建物以外では出土しません(図 7)。この事実は赤彩円文というデザインが非日常的な特別な空間で機能した可能性が高いことを意味しています。

また赤彩円文は鳥形土製品にも描かれています(図 9)。類例としては神奈川県羽根尾堰ノ上遺跡(弥生時代中期後葉)の事例がありますが、これは鶏をかたどったものと考えられています。朝日遺跡の事例は作りこそ粗雑ですが、同時期には鶏の骨も発見されているため、本例も鶏をイメージして塗布された可能性は十分にあります。

記紀神話で鶏は常世の長鳴き鳥として、天岩戸に隠れたアマテラスを呼び戻す重要な存在として書かれています。もちろん史実ではありませんが、鶏形土製品に赤彩円文が描かれた事実は、赤彩円文が太陽を模したデザインである可能性を想起させます。

気候の寒冷多雨化が進むなかで、安定的な過去の集落を懐かしみつつ、乾きをもたらす太陽への意識を強めた人々の想いが、SZ132 の方位に投影されたのかもしれませんが。

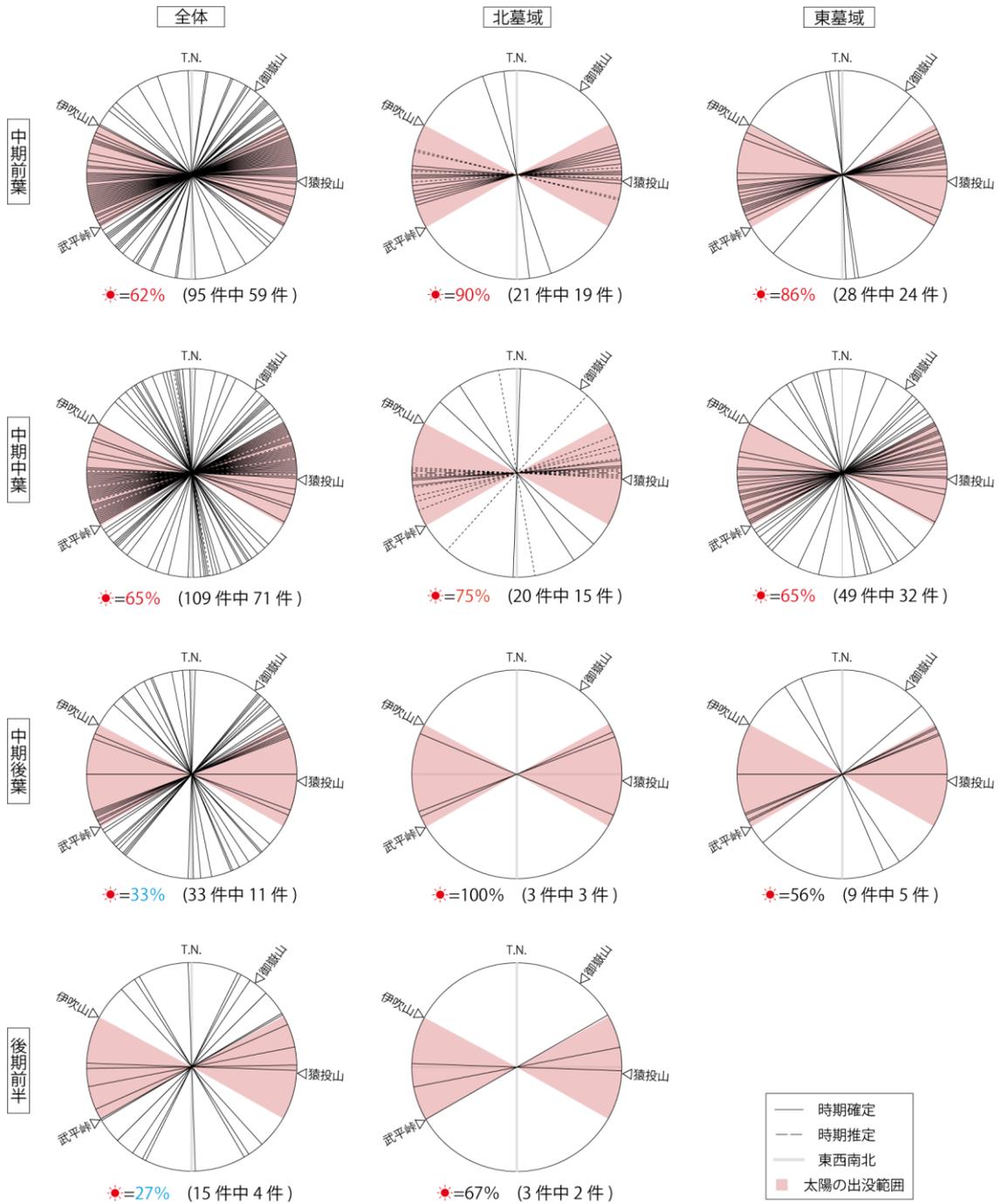


図5 朝日遺跡の方形周溝墓の長軸方位①

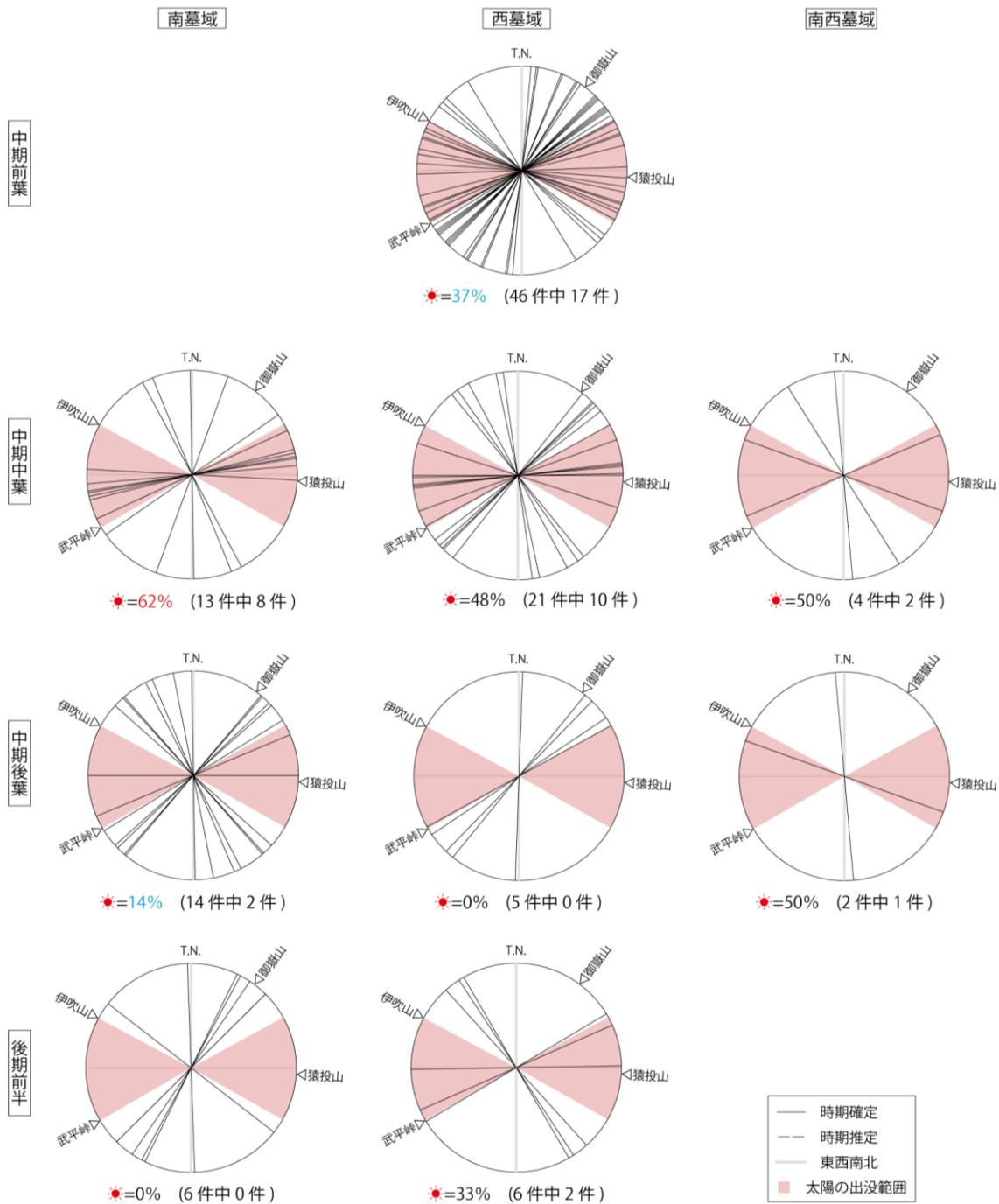


図6 朝日遺跡の方形周溝墓の長軸方位②

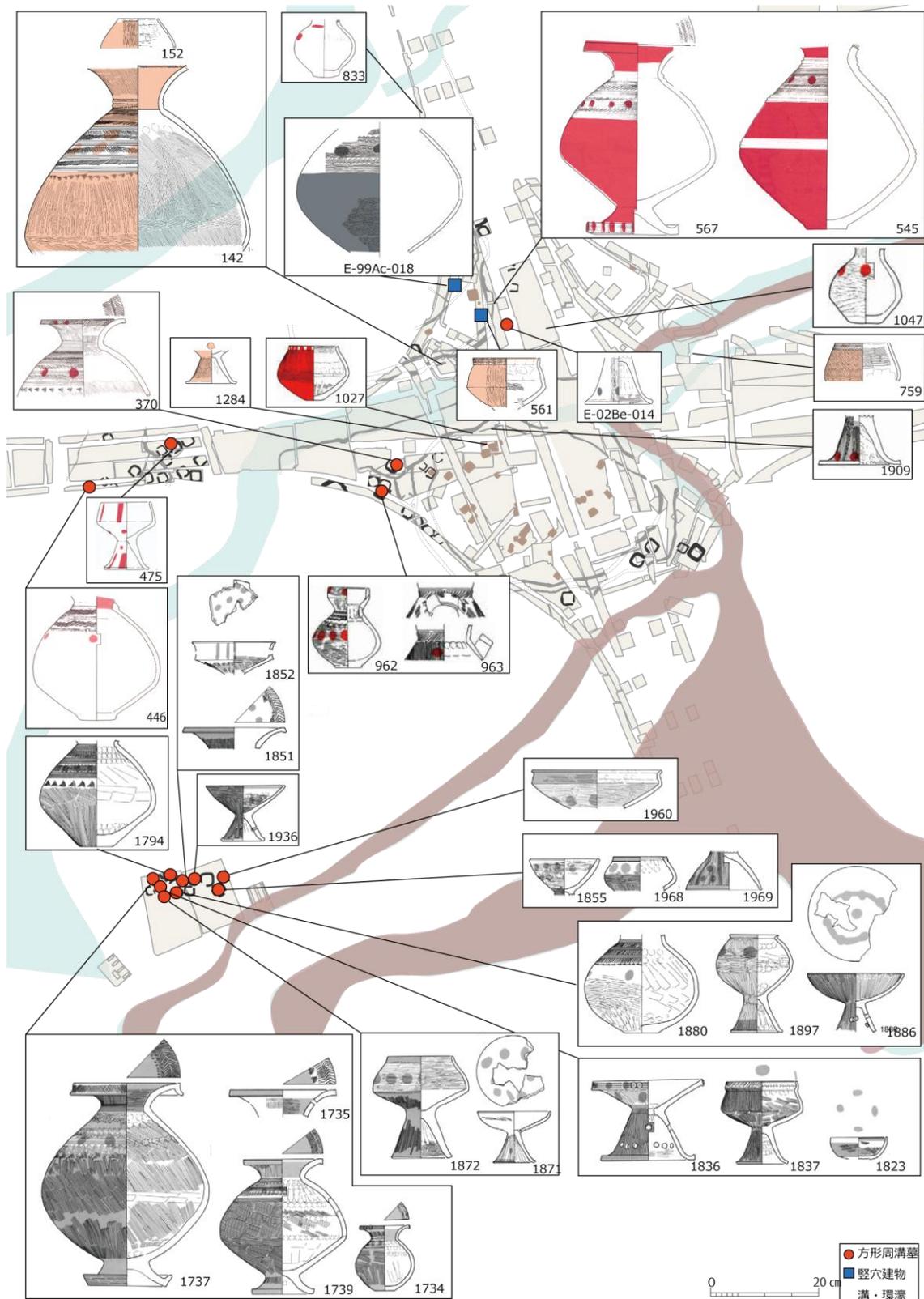


図7 赤彩円文を持つパレス・スタイル土器の分布

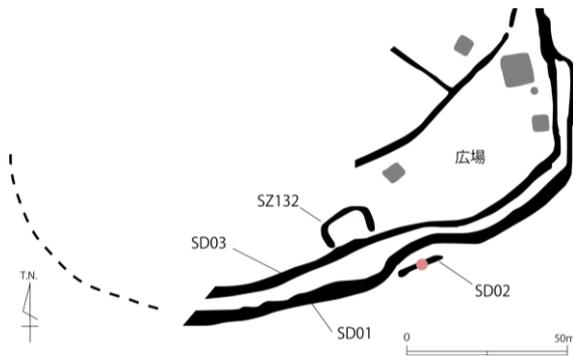


図8 方形周溝墓 SZ132



図9 赤彩円文をもつ鳥形土製品

### 3. 継承される民俗方位 —弥生から古墳へ—

古墳時代前期になると畿内などの大型前方後円墳は埋葬方位を南北 に向けるようになります。しかし、濃尾平野では南北に収束することはなく、東西すなわち太陽を基準とした民俗方位が受け継がれていたようです(図 10)。

その典型例が東之宮古墳です。チャートの岩盤で形成された白山平の頂上を平らに削平し、複数の土を混ぜた盛土で造られた古墳です。類例のない人物禽獣文鏡も出土しており、造墓者が強いこだわりを持っていたことがわかります。その墳丘方位は冬至の日の出と夏至の日の入とほぼ一致しています。

測量図を基に盛土の量を計算したところ、墳丘に必要な土を運ぶだけでも、のべ 12,328 人もの労働力が必要になることがわかりました。仮に 1 日に 100 人が盛土を運搬したとしても、最低 124 日はかかる計算です。もちろん岩盤の掘削作業も必要になるので、完成までには相当な月日がかかったことでしょう。大規模な労働力を動員して築かれた古墳の方位が、無秩序に定められたとは考えにくく、むしろ地域の伝統的な民俗方位が採用されたのだと考えるほうが自然ではないでしょうか。

【註】

1) 朝日遺跡の暦年代は報告書記載の放射性炭素年代測定結果を参照しています(赤塚 2009a)。

【引用文献】

赤塚次郎 2009a 「暦年代」 『朝日遺跡 8』 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 154、134-137 頁

赤塚次郎 2009b 「朝日遺跡としての集落景観と変遷」 『朝日遺跡 8』 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 154、149-152 頁

大重幸二 1971 「バリ島の古村における方位観念について」 『季刊人類学』 第 2 巻第 2 号、社会思想社、215-236 頁

大林太良 1977 「生まれる前から死んだ後まで」 『講座・比較文化』 第 2 巻アジアと日本人、研究社出版、175-196 頁

金城朝永 1950 『北をニシと呼ぶ話』 「金城朝永全集 上巻 言語・文学篇」 所収 1974 沖縄タイムス社、337-339 頁

倉田勇 1978 「バリ島の家屋敷と場位観」 『人類学研究所紀要』 第 7 巻、南山大学、47-58 頁

倉田勇 2009 「『民俗方位』の一考察」 『天理大学学報』 第 24 巻第 2 号、68-49 頁

鈴木正崇 1978 「南西諸島に於ける方位観の研究」 『人文地理』 第 30 巻第 6 号、人文地理学会、61-74 頁

樋上昇 2016 「朝日遺跡出土木製品の出土地点および器種・樹種組成についての再検討」 『愛知県埋蔵文化財センター研究紀要』 第 17 号、49-60 頁

